

経営体の概要（養豚一貫経営）

1 経営状況

（1）氏名、年齢、住所、経営形態

有限会社花田養豚場（代表取締役社長 田中 真）、35歳、十日町市、養豚一貫経営

（2）地域の概要

十日町市は、市の中央を日本一の大河である信濃川が流れ、十日町盆地とともに雄大な河岸段丘が形成されており、市の南部には上信越高原国立公園の一部である清津峡、西部には日本三大薬湯のひとつ松之山温泉がある。

気候は、典型的な日本海型気候で積雪は2～3mにも及ぶが、この雪が清澄な水をもたらし、良質米生産の源泉になっている。

（3）経営の経過

年 月	事 項	母豚頭数	備考（施設整備等）
昭和59年5月	法人設立	150頭	創設者：丸山隆太
昭和63年5月	繁殖豚舎増築	170頭	自動給餌ライン
平成元年4月	肥育豚舎新築	190頭	自動給餌ライン 自動除ふん装置
平成9年4月	（田中 真氏、花田養豚場に入社）	200頭	
平成12年2月	繁殖豚舎増築	210頭	自動給餌ライン 自動除ふん装置
平成13年4月	（田中 真氏、農場長に就く）	210頭	
平成15年5月	肥育豚舎増築	230頭	自動給餌ライン 自動除ふん装置
平成16年3月	クリーンポーク生産農場認定 （畜産安心ブランド生産農場）	230頭	妻有グループ全農場が認定
平成16年12月	肥育豚舎増築	230頭	自動給餌ライン 自動除ふん装置
平成23年7月	防臭壁設置	240頭	
平成23年8月	（田中 真氏が、花田養豚場の経営を継承）	240頭	創設者は会長職に就任 （養豚事業から引退）
現在	母豚300頭規模に向けて増頭中	250頭	

(4) 労働力の状況

総労働力	代表取締役社長	取締役	従業員	パート
	6人	1人	2人	3人

(5) 規模、生産量（直近1年間の実績）

母豚 250 頭、年間肉豚出荷頭数 5,300 頭

(6) 自給粗飼料栽培面積（直近1年間の実績）

該当なし

(7) 経営の特徴

- 創業家以外の第三者に経営を継承し養豚業を継続している経営である。
 - ・現社長の田中氏は養豚農家の出身ではないが、創業家の長男と幼なじみであったことが縁で平成9年に入社し、13年に農場長に就き、23年に代表取締役社長を任されるに至った。
 - ・創業者は、長男が他産業に就職しており、養豚業を継がないことが決定していたことから、廃業も考えていたが、養豚業を誰かに託したい気持ちが強く、従業員である田中氏に経営継承について打診した結果、田中氏は社長を引き継ぐ決心をし、現在に至っている。
- 自動給餌ライン、自動除ふん装置など機械化による省力管理方式を採用し、ウィークリー養豚を実施することで、従業員の休日確保など、ゆとりのある養豚経営を行っている。
- 繁殖記録等をパソコンで管理しそのデータを利活用している。見落としがちになりやすい豚の異動状況や健康状態等が正確に記録されることで、飼養管理状況が的確に把握でき、それぞれの処置や対応が迅速に行われ、特に繁殖成績の改善につながっている。
- 地域一丸となった取り組みを実践する養豚経営を展開している。
 - ・オーエスキー病の侵入防止のため、外部導入豚に対する隔離豚舎での検疫等、防疫対策に取り組んできた結果、オーエスキー病はもとより、PRRSは県内で唯一の清浄地域となっており、このことが、子豚期から出荷まで抗生物質無添加飼料による飼養を可能とする衛生的な環境を作り上げている。
 - ・当該農場も構成員である妻有畜産グループは全農場でクリーンポーク認定事業のHACCP手法を取り入れた衛生管理システムを実践している。

平成16年にはグループ全10農場が新潟県の認定第1号から第10号となり、現在も全農場が畜産安心ブランド生産農場を維持し、同グループ内で生産された豚肉は、地元の学校給食に活用されるなど、地域内における食の安全・安心の確保に貢献している。

(8) 耕畜連携の状況

- 地元の稲作農家、生産組織などへ豚ふん堆肥を供給し、地域循環型農業の推進に貢献している。
- 生ゴミや未利用資源の堆肥化施設である川西有機センターに豚ふんを優先的に供給することで、地域循環型農業の一翼を担っている。

(9) 取組の先進性、経営戦略など

- コミュニケーションなどを通じた仕事への意欲向上や信頼関係の構築など、創業者が築いた従業員教育の伝統を現社長がしっかり継承し、従業員育成に取り組んでいる。
- 妻有グループの事務責任者として中核的な存在となっており、当該農場の従業員のみならず、地域全体の養豚従事者のスキルアップに取り組んでいる。特に若い生産者や従業員教育に力を入れており、「ぶたのしっぽ」という会を作り、消費者に安全でおいしい豚肉を供給するため、最新の衛生対策など養豚技術を学ぶ勉強会を定期的で開催している。

(10) 地域への貢献

- 地元消費者との交流会や地産地消運動を実施して妻有ポークの安全性を PR し続けた結果、現在では十日町市の学校給食で 100%、津南町でも多くの学校で妻有ポークが採用されている。

(11) 今後の目指す方向性と課題

- 収益性の向上を図るため、将来、母豚 300 頭程度に規模拡大する計画であるが、畜舎の老朽化が目立ち始めているので、労務の改善と作業効率の向上が図られるよう施設の改修を実施する。
- 衛生的で豚にとってストレスが少ない状態で飼養環境を整備したいと考えている。
- 住宅地側に防臭壁を設置するなど地域の環境保全に努め、畜舎周辺環境の更なる整備、充実を図りたい。

生産技術の概要（直近 1 年間の実績）

区分	単位	実績	平成 25 年度 コンサル平均
母豚平均飼養頭数	頭	250.0	123.8 (H26.2.1 県平均)
母豚 1 頭当たり分娩頭数	頭	12.3	12.1
母豚 1 頭当たり離乳頭数	頭	10.3	9.5
平均分娩間隔	日	149.0	162.3
年間換算離乳子豚頭数	頭	25.2	21.6
離乳時育成率	%	87.3	86.4
肉豚事故率	%	7.0	8.5
枝肉重量	kg	72.6	73.8
上物率	%	44.2	49.4
母豚 1 頭当たり年間肉豚出荷頭数	kg	21.2	19.5